

巻頭言

「いのちに合掌」と「すべてのいのちを守るために」

三原 正資

映画「スター・ウォーズ 9」を見た。一九七七年の第一作公開から四二年。最初のヒーロー、マーク・ハミル（一九五一年）、ヒロインのキャリー・フィッツシャー（一九五六―二〇一六）は、本作では面影を残しながら四〇年の時を刻んでいた。長いエンド・クレジットを見ながら、館内を去る人はいなかった。心おどる主題曲を聴きながら、自己の歩みを振りかえり、万感胸に迫った。

私たち、今、死が身近になった戦後世代は映画とともに歩んできたと言ってもよい。一九五〇年代末から、「日蓮と蒙古大襲来」（一九五八）、「釈迦」（一九六一）。洋画は「ウエストサイド物語」（一九六一）、「史上最大の作戦」（一九六二）、「アラビアのロレンス」（一九六二）、そして「偉大なる生涯の物語」（一九六五）、「天地創造」（一九六六）などの『聖書』をテーマにした映画にも心魅かれ、映画館に足を運んだ。

突然、このようなことが脳裏に浮かんだのは、令和元年（二〇一九）一月二五日、全日本仏教会の一員としてローマ教皇ミサに招待され参列していたことだった。私たち一人ひとりに配られたパンフレット『教皇ミサ すべてのいのちを守るため 主司式…教皇フラ

---

---

ンシスコ『東京ドーム』に従って、ミサは進行していた。

その中に、「創世記」と「マタイによる福音書」が引用され、その朗読を聞きながら、私は二つの映画のシーンを思い出したのである。

初めに神は天地を創造された。

神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」

神は御自分にかたどって創造された。

神にかたどって創造された。

男と女に創造された。

神は彼らを祝福して言われた。

「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

キリスト者は神によって自己が創造されたことをよろこびにしているという。ミサのテーマ「PROTECT ALL LIFE」とは神によって造られたこの世界、すべてのいのちを守るということである。

「マタイによる福音書」の一節は美しく、心をうつ。

なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意してみなさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の花でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか。信仰の薄いものたちよ。だから、「何を食べようか」「何を飲もうか」「何を着ようか」と言って、思い悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。

この「福音朗読 Gospel」ののち、これをうけて教皇の「説教 Homily」があった。教皇は「日本の人々は互いの競争意識によって孤立している。この世のことは神の贈りものであり、私たちは所有者ではない」と語った。

フランシスコ教皇（83）を『貧者のための教会』を掲げ宗教の枠を超えた人気を博すと紹介した「毎日新聞」（令和元年二月三〇日）は、来日の模様を次のように伝えている。

教皇は被爆地の長崎、広島を相次いで訪問。「（軍拡競争は）途方もないテロ行為」「核兵器を保有することは倫理に反する」と強い言葉で核廃絶を訴え、かつてのバチカンが容認していた核抑止論を改めて否定した。

勇気が必要とする発言である。この発言によって、「すべてのいのちを守るため」というテーマが意味をもったと思う。

私は「創世記」と「マタイによる福音書」の朗読を聞いて、『法華経』「譬喩品」と「葉草喩品」の一節を考えた。

今この三界は、みなこれ我が有なり。そのなかの衆生は、悉くこれ吾が子なり。しかも今このところはもろもろの患難多し。ただ我れ一人のみ、よく救護をなす。

その雨、普等にして四方俱に下り、流澍すること無量にして、率土充ち洽う。山川險谷の幽邃に生いたるところの卉木藥草、大小の諸樹、百穀苗稼、甘蔗葡萄、雨の潤すところ豊かに足らざることなく、乾地普く洽い、藥木並に茂り、その雲より出づるところの一味の水に、草木叢林、分に随って潤を受く。一切の諸樹、上中下等しく、その大小に称うて、おのおの生長することを得。

紀元前一世紀に発見された「ヒッパロスの風」(『初期仏教』 馬場紀寿 岩波新書 二〇一八)と呼ばれた季節風によって盛んになったインド西海岸とローマとの海上交易によって、影響しあい成立したかのような「創世記」「マタイによる福音書」の一節と「譬喩品」「葉草喩品」の物語である。『聖書』や『法華経』は、かつて、ヤスパースが指摘したように、人類発展の初期に誕生し、東西の二〇〇〇年を生きた人びとの心を支えてきた。

ところで過日のことだが、私はある外国人僧侶にお題目の英語表現をたずねたことがあった。しばらく考え、彼は答えた。

「I chant in respect for all life びんぶびんぶ じやうか」

RESPECT FOR ALL LIFE（すべてのいのちを敬う）ということには『法華経』の「譬喩品」「薬草喩品」そして「常不軽菩薩品」に込められたブツダの思いがあらわれているのではないか。私たちの宗門運動のテーマ「いのちに合掌」といつてもよいだろう。

私は東京ドームの中で、パンフレット『教皇ミサ』を開き、テーマPROTECT ALL LIFEを目にしたとき、RESPECT FOR ALL LIFE（いのちに合掌）と似ていることに驚いたのであった。

発展が極限に達し、生きていくことが困難な時代が、異なった宗教に何を望んでいるかを示しているのではないか。

見田宗介氏は『戦後思想の到達点』（NHK出版 二〇一九）の中で大澤真幸氏に次のように述べている。

現代は対照的に、「近代」という無限に拡大してゆく世界の成功それ自体の帰結として、地球環境の有限性に直面し、この「有限性」としての生を支える思想の確立が求められています。

今の世界の状態を表現するとすれば、『法華経』「譬喩品」の

三界は安きことなし、なお火宅の如し。

という一句ほど印象的なことばはないにちがいない。オーストラリアの大火災は、マネーを追求して止まない欲望が招いた現象、気候危機のあらわれである。

さて、「スター・ウォーズ」シリーズの中でダース・ベイダーと並んで人気があった、いかにもひょうきんな金色のAIロボットC-3POを演じたアンソニー・ダニエル氏は、四〇余年にわたる「スター・ウォーズ」の中で「夢と冒険を経験した」と語っていた。これから、私たちの宗教は、「スター・ウォーズ」を体験した人々のように「夢と冒険」を共有できるのだろうか。

「スター・ウォーズ9」では、ジェダイの騎士の活躍によって人びとは再び平和を手にした。しかし、私たちの地球では、平和、環境をはじめ、いのち (ALL LIFE) はかつてない危機に直面している。

私たちはまもなく宗祖降誕八〇〇年を迎える。この世界のいのちの危機にたちむかおうではないか。宗祖の誕生から始まる「日蓮が不思議」(『種種御振舞御書』定遺九七五頁) Ⅱ 奇跡の物語を共にしながら。